

わが国の運動部活動は、教育と競争とが調和する着地点を見出し得ない状況が続いている。そもそもが、教育は既に競争社会の一装置として機能していることは事実です。そうです。毎年やってくる受験、しかも幼稚園に入園する時点：いやその準備のための塾に入るためにも競争が発生する現状です。

運動部活動の多くはスポーツ文化を継承する活動であり、その文化特性の中核に競争を内在している。スポーツは、競争を享受することをメインとする文化と言えるでしょう。競争を本質とする文化を教育の中で、子供たちの成長に資する活動として実施しているのが運動部活動である。教育が競争社会の装置として機能していることと、スポーツの本質としての競争を教育活動において子供たちに継承していくことは、本来、切り離して考えなければならぬ。

スポーツの教育的意義や効果は確かにあるのかも知れない。でも、もしかするとそれは、スポーツから様々な恩恵を受け、スポーツに好意的な人々の論理なのではないか？と考えるようになった。逆の見方をすると、スポーツに教育的意義や価値など認めない人々もいると思うんです。誤解を承知で言えば、「競争社会に利用される教育」と「競争を本質とする運動部活動」の間で複雑に絡み合う糸を解していく作業をしないまま、運動部活動における「教育と競争」の調和する着地点は永遠に見出せない気がしています。

本来の「教育」、特に「公」教育は、われわれに平等に施され、個々の能力を最大限に引き出すことに注力される。当然、教育の一環である「運動部活動」において、スポーツ本来の「競争」を享受することもまた、平等に与えられた子供たちの権利である。しかし、現実はい：そう単純ではない。考えれば考えるほど、実に複雑怪奇に見えてくる。スポーツで完結する競争が、社会の競争（受験という競争装置）にも影響する。ここにスポーツ本来の「遊びとしての競争」から、実人生に関与する「実社会の競争」へのスライドが成立している。

もしかすると現状のままでは、もう素手で解くことはできないのかも知れない：そう、言わば、「何重にも固結びにされた糸」が塊となつてどんどん大きくなっている状態。この塊は、道具なしには解せない：そんな迷路の中で出会った灰谷健次郎：。灰谷健次郎は小学校の先生だった。その後、多くの童話や小説を残した作家として知ってはいました。我が家の本棚にも何冊か並んでいる。でもちゃんと読んだことはなかった：。ミスったと思いましたね。教育大に通う女学生からの手紙を受け取った灰谷は、彼女がこれまで教育によって傷つき、苦しみ病んできた過去をさらけ出しながら、教育実習で出会う子供たちに救われた経験や、その時の指導教員の姿に教育の本質を発見していく過程をあたかく見守る。

灰谷は、「こんにちの教育現場には、人間を、子供たちをこまやかなものとしてみる視点が、無残なほどに欠落している。そのために教育そのものが兇器と化し、子供たちを傷つけ、深く、その心身を病ませるのだ。人間の優しさとかまやかさが教師の側に乏しく、教育を受ける側に、より深いとしたら、これほどの悲劇はない：。」と、一九八〇年代の現場に危機感をもって語りつつ、彼女の手紙に光を感じている。

タイトルは、「優しさとしての教育」です。灰谷が伝えたかったことは、人間の優しさを全身で伝える活動としての教育の在り方だったように私には読めたんです。これまで、運動部活動は厳しいことが子供のため：という風潮があったし、現在もそうだ。勝利に沸く子供たちがいる一方で、勝利のための競争に傷つく子供たち、スポーツに内在する競争は楽しいはず：その面白さを享受できない現状は、スポーツ基本法の理念とは程遠い現状なのではないだろうか。

もつれた糸の塊を解きほぐす光に、優しさとしての運動部活動なる視点が、きっと必要なのかもしれない。